

主な動物由来感染症①

狂犬病

● 病気の特徴(症状)

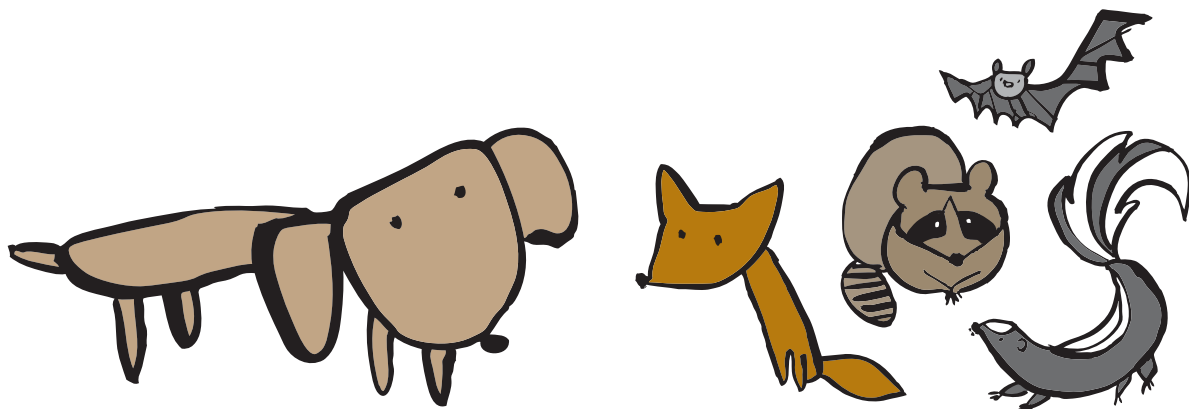
通常1～3カ月月の潜伏期間の後に発症。初期は風邪に似た症状で、咬まれた部位に知覚異常が見られる。不安感、恐水症、興奮、麻痺、錯乱等の神経症状が現れ、数日後に呼吸麻痺で死亡する。発症してしまうと100%死亡する。

● 感染経路・感染状況

感染した犬、猫、アライグマ、キツネ、スカンク、コウモリ等に咬まれる等唾液中のウイルスとの接触により感染する。日本では1957年を最後に国内の動物での発生はないが、近年、海外で犬に咬まれて感染した人が帰国後に発症して死亡するという例が確認されている。世界のほとんどの地域で発生しており、狂犬病による死者は年間3～5万人といわれている。特にアジアとアフリカでの発生が多い。

● 予防

- 万一の発生時に備え、日本では飼い犬に、年1回必ず狂犬病予防注射を受けさせる(4～6月)。
- 飼い犬は市町村窓口で登録する(犬の取得時に1回)。
- 犬、猫、アライグマ、キツネ及びスカンクを輸出入する場合は 必ず検疫を受けさせる。
- 海外ではむやみに動物にさわらない。
- 渡航先で狂犬病のおそれのある犬等に咬まれたら、すぐに傷口を石けんときれいな水でよく洗い、速やかに医療機関で傷の処置と治療、狂犬病ワクチンの接種等をうける。
- 狂犬病の流行国で犬や野生動物に接する機会がある場合、渡航前にワクチンを接種しておくが良い。



クリミア・コンゴ出血熱

● 病気の特徴(症状)

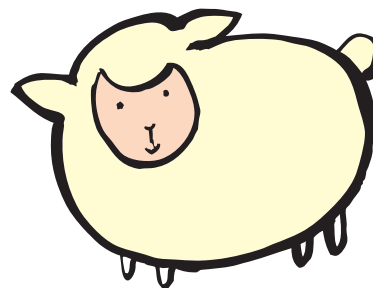
潜伏期間は2～9日。発症は突発的で、発熱、頭痛、筋肉痛、腰痛、関節痛が見られ、重症化すると発熱に加え、点状出血から大紫斑^{だいしはん}まで種々の程度の出血が見られる。発症率は感染者の20%程度、致死率は15～40%と推定されている。

● 感染経路・感染状況

ダニ^かに咬まれたり、感染動物(特にヒツジ等の家畜の血液、体液)と接触したりして感染する。中国西部、中央アジア、中近東、ロシア、東欧、アフリカ大陸で地方病的に流行しているが、日本やアメリカ大陸での発生はない。

● 予防

- 流行地では、ダニが重要な感染経路となるので、長袖、長ズボンを着用し、素足でのサンダル履き等は避ける。また、家畜等にむやみに^ふ触れない。



鳥インフルエンザ

● 病気の特徴(症状)

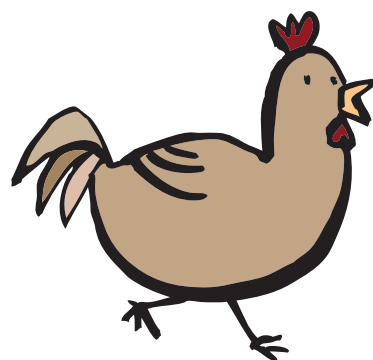
鶏、七面鳥、ウズラ等が高病原性の鳥インフルエンザウイルスに感染すると、全身症状を示して死亡する。特にH5N1亜型の感染はアジア・アフリカ等で拡大しており、感染した鳥や死亡した鳥と接触した人が感染する事例も報告されている。症状の多くは発熱、呼吸器症状(肺炎)であるが、多臓器不全で死に至る場合もある。

● 感染経路・感染状況

人は、感染した鳥やその排せつ物、死体、臓器等に濃厚に接触することによってまれに感染することがある。日本では発症した人は確認されていない。自然界では、渡りをする野生の水きん類(カモ等)がウイルスを保有している場合がある。

● 予防

- 鳥インフルエンザの流行地域で病気の鳥や死んだ鳥にむやみに近づかない、さわらない。
- 国内の鳥で発生があった場合、^{ぼうえき}防疫作業に従事する者等は徹底した感染防御と健康管理を行う。



主な動物由来感染症②

エキノкокクス症(多包条虫症)

● 病気の特徴(症状)

エキノкокクス条虫の虫卵が口から入ることで感染する。虫卵は腸の中で幼虫になり、その後肝臓に寄生する。感染後、数年から十数年ほどたって自覚症状が現れる。初期には上腹部の不快感・膨満感の症状で、さらに進行すると肝機能障害を起こす。

● 感染経路・感染状況

日本では、北海道のキタキツネが主な感染源で、糞中に病原体であるエキノкокクスの虫卵を排出する。北海道で放し飼いをして感染した犬もキタキツネ同様に感染源となる。人はエキノкокクスの虫卵が手指、食物や水等を介して口から入ることで感染する。人は血清等で検査可能であるが、治療は外科手術が必要となる。犬は糞便で虫卵の検査が可能。

● 予防

- キタキツネ等との接触をできるだけ避け、外出後は手をよく洗う。
- キツネを人家に近づけないよう、生ゴミ等を放置せず、エサを与えたりしない。
- 沢や川の生水は煮沸してから飲むようにする。
- 山菜や野菜、果物等もよく洗ってから食べる。
- 犬も感染した野ネズミを食べて感染するため、放し飼いをしない。



ペスト

● 病気の特徴(症状)

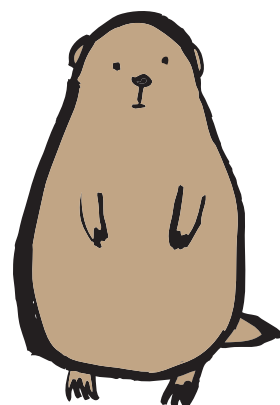
腺ペスト、敗血症^{はいけっしょう}ペスト、肺ペストに大別され、人のペストの80～90%は腺ペストである。腺ペストの場合は急激な発熱(38℃以上)等と全身状態の悪化、リンパ節^{しゅちよう}の腫張等が起こる。腺ペストから敗血症^{はいけっしょう}ペスト、肺ペストに移行すると致死率が高くなる。適切な抗菌薬(ストレプトマイシン等)による治療を行わないと予後不良。

● 感染経路・感染状況

多くが病原体保有ノミに刺されることによるが、感染動物(プレーリードッグ等の野生齧歯類^{げっしるい}等)の体液^ふに触れたり、まれに菌の吸入によっても起こる。日本では1926年以来発生はないが、南北アメリカ、アフリカ、アジア、インドで地方病的に存在し、世界的には1990年以降患者が増加している。

● 予防

- 発生地では野生齧歯類^{げっしるい}等の感染動物との接触に注意。



● 病気の特徴(症状)

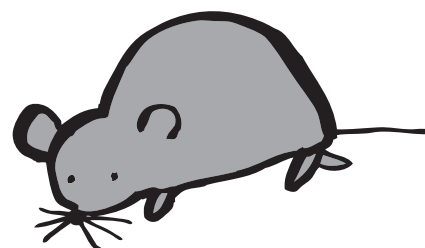
5～14日の潜伏期の後に、38～40℃の発熱、悪寒、頭痛、筋肉痛、結膜充血等の初期症状で発症する。重症の場合は、発症後5～8日目に黄疸、出血、腎機能障害等の症状が認められる。

● 感染経路・感染状況

保菌動物(犬、ネズミ等)の尿中に菌が排出される。感染動物の尿^ふに触れたり、尿に汚染された水や土等から皮膚や口を介して感染する。全国で散発的に発生しているが、地域によって集団発生も報告されている。

● 予防

- ネズミの駆除等のレプトスピラ保菌動物への対策や衛生環境の改善。
- 感染の可能性のある動物と接触する場合は手袋やゴーグル等を着用。



レプトスピラ症

主な動物由来感染症③

チクングニア熱

● 病気の特徴(症状)

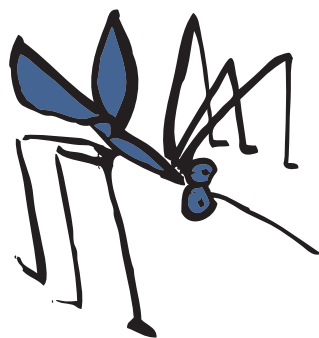
患者の大多数は発熱で始まる急性熱性疾患の症状を呈する。発熱、関節痛で発症し、発疹をきたすことが多い。関節痛は手足に認められ、多くの場合、両手両足に発生し、関節の炎症や腫脹を伴う。関節痛は急性症状が軽快した後も、数週間から数ヶ月にわたって続くことがある。これらの症状に加え、全身のけん怠感・頭痛・筋肉痛・リンパ節腫脹が認められる場合もある。また出血傾向(鼻出血や歯肉出血)、結膜炎や悪心・嘔吐をきたすこともある。重症例では神経症状(脳症)や劇症肝炎が報告されている。

● 感染経路・感染状況

チクングニアウイルスを保有する蚊(主にヤブ蚊)に刺されることにより感染する。近年、東南アジア地域で発生の広がりが見られている。

● 予防

- 流行地域では蚊除け剤の使用や、長袖・長ズボンを着用して素肌を露出させない等、蚊に刺されないようにする。



ウエストナイル熱

● 病気の特徴(症状)

突然の発熱(39℃以上)、頭痛、筋肉痛、時に消化器症状、発疹。通常、1週間以内に回復するが、その後けん怠感が残ることも多い。感染者の約1%未満が、重篤な症状として脳炎、髄膜炎、麻痺、昏睡等を示す。感染者の約80%は不顕性感染。

● 感染経路・感染状況

ウエストナイルウイルスを保有する蚊(イエ蚊・ヤブ蚊)に刺されることにより感染する。近年、欧米地域での発生も確認されている。日本では、発生は見られていない。

● 予防

- 流行地域では蚊除け剤の使用や、長袖・長ズボンを着用して素肌を露出させない等、蚊に刺されないようにする。

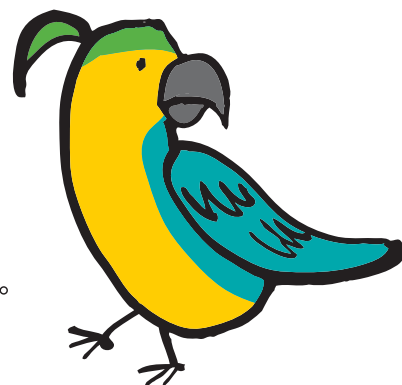
オウム病

● 病気の特徴(症状)

突然の発熱(38℃以上)で発症、咳が必ず出て、痰を伴う。全身けん怠感・食欲不振・筋肉痛・関節痛・頭痛等のインフルエンザのような症状。重症になると呼吸困難・意識障害等を起こし、診断が遅れると死亡する場合もある。

● 感染経路・感染状況

インコ、オウム、ハト等の糞に含まれる菌を吸い込んだり、口移しでエサを与えることによっても感染する。平成17年、国内の動物展示施設で従業員や来場者の間の集団感染があった。



● 予防

- 鳥を飼う時は、ケージ内に羽や糞が残らないよう常に清潔を心がける。
- 鳥の世話をした後は、手洗い、うがいをする。
- 病鳥から菌が大量に排せつされるので、鳥の健康管理に注意する。
- 口移しでエサを与えない等、節度ある接し方が大切。
- 鳥を飼っている人が治りにくい咳や息苦しさ等の症状を感じたらオウム病を疑って受診し、鳥を飼っていることを医師に伝える。鳥が元気のない時、死んだ時等に人が上記のような症状を感じたら速やかに受診する。
- 信頼のおけるペットショップで健康な鳥を購入する。

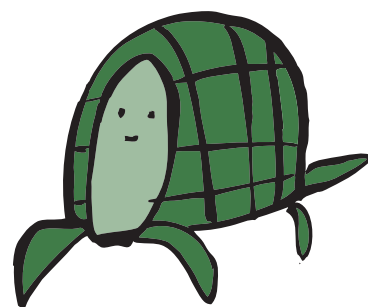
サルモネラ症

● 病気の特徴(症状)

感染した人の多くが胃腸炎症状を呈するが、無症状のこともある。まれに菌血症、敗血症、髄膜炎等の重症となり、ひどい場合には死亡することもある。

● 感染経路・感染状況

通常サルモネラ症は汚染された食品を介して感染するが、爬虫類等の動物との接触を通じて感染することもある。国内外の文献によると、カメ等の爬虫類の50～90%がサルモネラ菌を保有している。日本でも子供がペットのミドリガメから感染し、重症となった事例がある。



● 予防

- ペットの飼育環境を清潔に保ち、特に下痢をしている動物や爬虫類の世話をした後は石けん等を使って十分に手を洗う。
- 免疫機能の低い人(新生児や乳児、お年寄り等)がいる家庭での爬虫類の飼育は控える。
- カメなどの飼育水を交換する場合は、排水により周囲が汚染されないように注意する。

主な動物由来感染症④

カプノサイトファーガ・カニモルサス感染症

● 病気の特徴(症状)

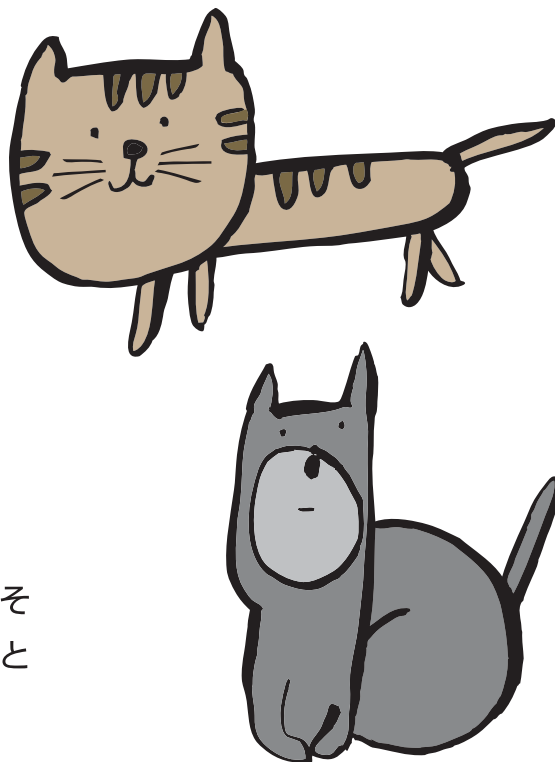
主な症状は、発熱、けん怠感^{たいかん}、腹痛、吐き気、頭痛等。まれに重症化して、敗血症^{はいけっしょう}や髄膜炎^{ずいまくえん}を起こし、播種性血管内凝固症候群^{はしゅせいけっかんないぎょうこしやうこうぐん}(DIC)や敗血性ショック^{はいけつせい}、多臓器不全に進行して死に至ることもある。患者の大半が40歳代以上で、男性が70%近くを占める。

● 感染経路・感染状況

犬や猫等の動物の口の中に普通に見られる細菌で、主に咬傷・搔傷から感染する。

● 予防

- 動物との節度ある触れ合いを心がけ、咬まれたり、引っ搔かれたりしないように気を付ける。



● 病気の特徴(症状)

初期は発熱・鼻汁等風邪に似た症状で、その後、咽頭痛^{いんとうつう}や咳^{せき}が始まり、ジフテリアと同様の症状を示す。

● 感染経路・感染状況

国内では、猫との接触またはその飛沫による感染が強く疑われた事例の報告がある。海外では、犬や猫以外にも牛等の家畜との接触や、殺菌されていない生乳の摂取による感染報告もある。

● 予防

- 成人用ジフテリアトキソイドやDPT(ジフテリア・百日咳・破傷風)三種混合ワクチン等が感染防御に効果があるとされている。
- くしゃみや鼻汁等の風邪様の症状や皮膚病^{てい}を呈している動物との接触を控え、動物と触れ合った後は手洗い等を行う。

コリネバクテリウム・ウルセランス感染症